

「愛と聖さの完成」

I テサロニケ 3:11-13

2021.8.29 南与力町教会朝拝

序. コロナウイルスによる礼拝の制限と祈り

コロナウイルスの感染拡大を受け、本日の礼拝より会堂には基本的に牧師と長老のみが集うこととなりました。皆さんと直接顔を合わせて主を礼拝し、交わりを持つことができないことは本当に残念です。しかし高知における感染状況を考慮すれば仕方のないことだと考えています。コロナの感染が収束へ向かい、また共に教会に集って礼拝をささげることができるようお祈りしたいと思います。

1. あなた方へ至る私たちの道を開いてくださるよう

そしてそのような祈りは、今日の個所に記されたパウロの祈りに通じるものがあります。3章11節でパウロは次のように祈っています。

「どうか、わたしたちの父である神御自身とわたしたちの主イエスが、わたしたちにそちらへ行く道を開いてくださいますように。」

パウロは、自分たちが伝道してできたテサロニケ教会と不本意な形で引き離されてしまいました。使徒言行録(17章)にあるように、ユダヤ人によるパウロたちへの迫害が起こったからです。パウロはその後にもテサロニケ教会の人々の顔を見たいと切に願ひ、実際そちらに行こうと何度も試みましたが。しかし、「サタンによって妨げられました」(2:18)と言われてます。具体的に何があったのかはわかりません。ユダヤ人による迫害のことを言っているのかもしれませんが。いずれにしろパウロはその妨げの背後にサタンが働いていることを感じていたのです。

今私たちが経験しているコロナ禍がサタンの仕業なのかどうか、安易に言うことはできません。しかしサタンは様々な苦しみや試練に乗じて私たち信仰者を誘惑し、神様から引き離そうとする。信仰を失わせようとする。そのようなサタンの働きに私たちは注意し、警戒している必要があります。

パウロはテサロニケ教会へ行こうと何度も試みましたが、実現できませんでした。しかし彼はそこで諦めたのではなく、祈り続けました。今日の個所のすぐ前の3章10節では次のように言われていました。

「顔を合わせて、あなたがたの信仰に必要なものを補いたいと、夜も昼も切に祈っています。」

パウロはやはり教会の人たちと直接顔を合わせたい、そして信仰に必要なもの、足りないものを補いたいと、夜も昼も切に祈り続けたのです。そしてその祈りの具体的な言葉が3章11節に記されているのです。

「どうか、わたしたちの父である神御自身とわたしたちの主イエスが、わたしたちにそちらへ行く道を開いてくださいますように。」

パウロは自分ではどうすることもできない状況の中で、「わたしたちの父である神御自身とわたしたちの主イエスが、わたしたちにそちらへ行く道を開いてくださいますように」と祈りました。「神ご自身」という言葉が強調されています。自分の試みは失敗してしまった、サタンに妨げられた。しかし、「神御自身が」、私たちの父である神御自身、そして私たちの主イエス・キリストが、私たちがあな

た方のところへ行く道を開いてくださるように。サタンによって置かれた妨げ・障害物を神が取り除き、あなたがたへと向かう私たちの道をまっすぐにしてくださるように。そのようにパウロは祈り続けたのです。

今、私たちが経験しているコロナウイルスによる災いも、私たちが自分の力ではどうしようもないところがあります。もちろん感染の予防をすることは大切です。ワクチンもある程度の有効性はあるでしょう。しかしそれですべて解決できるかという点、できない現実があるのです。しかし私たちにはできなくとも、私たちの父なる神様、私たちの主イエス・キリストにはそれが可能です。ですから、私たちもパウロのように、祈り続けたいと思います。今はコロナのことで、その他の要因で、お互いに顔を合わせて会えない状況があります。しかし私たちの父なる神が、主イエス・キリストが、その妨げを取り除き、私たちが再び会うことのできる道を開いてくださるように、共に祈りましょう。

2. 愛で満ちあふれさせてくださるように

そしてパウロは教会のために続いて次のように祈ります。3章12節

「どうか、主があなたがたを、お互いの愛とすべての人への愛とで、豊かに満ちあふれさせてくださいますように、わたしたちがあなたがたを愛しているように。」

「豊かに満ちあふれさせてくださいますように」と訳されている言葉は、原文では二つの似たような意味の動詞が重ねられ、強調されています。一つ目は「増し加える、豊かにする」、二つ目は「あふれ出させる、あふれるほど豊かにする」という意味があります。パウロは教会のために、「主があなたがたの愛を増し加え、あふれるほど豊かにしてくださるように」と祈っているのです。テサロニケ教会の人々は既に愛し合っていました。1章3節では「あなたがたが信仰によって働き、愛のために労苦し、また、わたしたちの主イエス・キリストに対する、希望を持って忍耐していることを、わたしたちは絶えず父である神の御前で心に留めているのです」と語られています。テサロニケ教会の人々は、すでに信仰によって働き、愛のために労苦し、イエス・キリストへの希望をもって忍耐していたのです。さらに3章6節では「ところで、テモテがそちらからわたしたちのもとに今帰って来て、あなたがたの信仰と愛について、うれしい知らせを伝えてくれました」と言われています。テサロニケ教会の人々は激しい迫害と苦難、試みの中にありながら、信仰と愛を保ち続けていたのです。パウロはそのことを何よりも喜んでいました。しかしパウロは今日のところで、主がその愛をさらに増し加え、豊かにしてくださるよう祈っています。その愛とは、「お互いへの愛」そして「すべての人への愛」です。「お互いへの愛」とは、教会の中での愛、主にある兄弟姉妹同士が愛し合う愛のことです。そして「すべての人への愛」とは、教会の外にいる人々への愛、クリスチャンでない人々への愛を意味していると思われます。そしてパウロは12節の最後で「わたしたちがあなたがたを愛しているように」と言い、自分たちのテサロニケ教会への愛を模範として指し示しています。パウロはこの手紙の中で、自分たちがテサロニケ教会の人々のことをいかに愛しているかを語ってきました。2章7節後半から9節までをお読みいたします。

「ちょうど母親がその子供を大事に育てるように、わたしたちはあなたがたをいとおしく思っていたので、神の福音を伝えるばかりでなく、自分の命さえ喜んで与えたいと願ったほどです。あなたがたはわたしたちにとって愛する者となったからです。兄弟たち、わたしたちの労苦と骨折りを覚えているでしょう。わたしたちは、だれにも負担をかけまいとして、夜も昼も働きながら、神の福音をあなたがたに

宣べ伝えたのでした。』

パウロたちは、母親が自分の子どもを愛するように、教会の人たちを愛していました。その愛のゆえに、ただ福音を語るばかりでなく、自分の命さえ喜んで与えたいと思った。そして実際、教会の人たちに負担・重荷を負わせないように、自ら労苦を負い、犠牲を払いました。夜も昼も働きながら、福音を宣べ伝えたのです。

パウロが、そして聖書が語る「愛」とは抽象的なものではありません。ただ「好き」というような感情でもありません。相手のために、自ら労苦し、犠牲を払う。そのような愛です。

私たちは自らの生活の中で、そのような愛をお互いに、またすべての人に対して持つことができているのでしょうか。私自身、自分を省みる時に、愛の乏しさを思い、恥ずかしい思いになります。自分を相手に与えるより、自己中心的な思いとなり、不平不満を募らせてしまうことがあります。

さらにパウロがここで祈っている愛は、「すべての人に対する」という広がりを持っています。この手紙の5章15節では次のように言われています。

「だれも、悪をもって悪に報いることのないように気をつけなさい。お互いの間でも、すべての人に対しても、いつも善を行うよう努めなさい。」

すべての人を愛するとは、自分に悪を行うような人をも愛し、善を行うということです。これは本当に難しいことです。自分を愛し、自分を大切にしてくれる人を愛することはそれほど難しくないかもしれませんが、しかし自分に悪を行ってくる人、嫌なことを言ったり、行ってくる人を愛することは、とても難しい。それは自分の努力や心がけだけではできないことです。

パウロもそのことを知っていたと思います。だからこそ、パウロは主があなた方の愛を増し加え、豊かにしてくださるよう、ここで祈っているのです。ここで言われている「主」とは、主イエス・キリストのことです。主イエスは、神に背き罪を犯す私たちのために、自ら命をささげ、十字架にかかって死んでくださいました。そのようにして主は私たちを愛し抜いてくださいました。そして主イエスは私たちに「愛し合いなさい」と言われるだけではなく、愛することのできない弱さを持つ私たちのために、愛を増し加え、豊かに満ち溢れさせてくださる、そのようなお方なのです。それゆえ私たちも、諦めることなく、主が私たちを、お互いへの愛とすべての人への愛で豊かに満ち溢れさせてくださるよう祈り続けましょう。

3. 心を強め、主の再臨の時、聖さにおいて責められるところのない者としてくださるよう

さらに、祈りは13節で次のように続き、閉じられます。

「そして、わたしたちの主イエスが、御自身に属するすべての聖なる者たちと共に来られるとき、あなたがたの心を強め、わたしたちの父である神の御前で、聖なる、非のうちどころのない者としてくださるよう、アーメン。」

パウロはここでわたしたちの主イエスが再び来られる再臨の時を見つめています。その時、私たちは、「わたしたちの父である神の御前」に立つことになります。その時、私たちに必要なことは、私たちが「聖なる、非のうちどころのない者」である、ということです。この言葉は「聖さにおいて非のうちどころがない、聖さにおいて責められるところ（非難される場所）がない」という意味の言葉です。それは人から見て「あの人は清い人だ」ということではなく、聖なる神様から見て、「聖において非のうちどころがない、責めるべきところがない」ということです。そして神様は、私たち人間の表

面・外に現れるものだけでなく、私たちの心をご覧になり、吟味されるお方です（2章4節）。心は私たちの人格の中心です。心から様々な汚れた思い、悪い思いが出てきます。悪い言葉や行いもやはり心から出てくるのです。それゆえパウロは主が「あなた方の心」を強め、清めてくださるよう祈っているのです。

主は私たちを愛で豊かにし、そうして心を強め、清めていってくださいます。教理の用語では「聖化」と呼ばれるものです。しかし私たちはなお心に汚れがあり、悪い思いを抱き、罪を犯してしまいます。それゆえ、この世において聖化は未完成です。しかし、主イエス・キリストが再び来られるときには聖化は完成します。主が私たちを神様の御前で「聖なる、非のうちどころのない者」としてくださる、「聖さにおいて責められるところのない者」としてくださるかたです。パウロはそのことをここで祈っているのです。今は愛に欠けがあり、心に汚れがあったとしても、主がそのようなあなたがたの愛を増し加えて豊かにし、その心を強め、清めていってくださいるように。そうして主が再び来られるときには、神様の御前に「聖なる、非のうちどころのない者」として立つことができるように。そのことを主に祈るのです。

結論

私たちは今コロナ禍を経験しています。そしてこのコロナの時代がいつ終わるのかなか見通せない状況に置かれています。しかし聖書は、世の終わりに主イエス・キリストが再び来られること、その時に神の国は完成し、私たちの救いも完成することを告げています。それゆえ私たちは主の再臨の時を待ち望みつつ、主が私たちの愛を増し加え、清めていってくださいるように。そのようにして私たちが主の再臨に備え、神の国に入る備えをしていくことができるよう祈ってまいりましょう。